
怪盗すていーるはーと！

モリヒデ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗すていーるはーと！

【Nコード】

N2301F

【作者名】

モリヒデ

【あらすじ】

青年浜井田路が出会った不気味な少女の正体とは・・・？！

アナタのハートを盗人ただけ

〈プロローグ〉

例えば、の話である。

皆さんは見たく無くても何らかの事故・事象によって、

その事柄を否応無く見せ付けられてしまった、

もしくはわけてしまった等という事は無いだろうか？

後の少年曰く「アレはなにか陰惨な事故か何かでこれもまたいつかの夢かなにかd（ry）」

そう、それは唐突も無く現れた。

いつもの何気ない学校からの帰路。

辺りはそこが商店街であるため、夕食の買出しにやって来ている主婦や

自分と同じく制服を着ている学徒達の群れがそこかしこに存在している。

俺は行きかう人々の往来の激しい商店街の入り口を抜け、

人気の無い路地から自分の暮らすアパートへの道をのんびり歩く。

ふと、違和感を覚えた。

いや、何も変わらないいつもの平坦なコンクリの地面は、夕陽でほんのり赤く染め上げられ、

両脇の塀からは家族の団欒のにぎやかな声が聞こえてくる。

別になにも変わりは無かった。俺はこのまま家について、

いつものように晩飯を作りながらニュースを片手間に見つつ、

食後は勉強したりテレビみたり曲聴いたり、

ごく一般的な今時の高校生の退屈な日常を送るはずだ。いやそうに
違いない。

だから今電柱の影で成りを潜めている妙にグラついてる影とか、

カドの出っ張った頭からまるで海藻だか藻だかが生え出ているよう
な妙なシルエットとかは

俺の視界には一切入ってはおらず。

勿論、「ちよつとそこのアンタ！こっちにきなさい。」なんて強張
った声を出したかと思えば急に

穏やかな声で手招きをする女なんて存在すら知らなつ、・・・女？

そつ。目を背けようとすればできたのだが

ついぞ見まい見まいとしていた現実を、俺はなぜか視界に入れてしまった。

まるで首が勝手に動くかの様に、自分の意思とは関係なく動き出していくかの様に・・・。

そしてソイツはそこにいた。

ソイツはまるで・・・こう・・・、なんと表現したら良いのだろうか。

とにかく「変」である事は確かだった。

全身黒タイツには（なぜか）若干のラメが入っていて、ソイツの怪しさを際立たせるための

装飾には顔に蝶々婦人よろしく蝶々の仮面をつけて、頭には丁度額の当たるところが横に赤いラインの入った

黒のシルクハットをかぶり、片手にはおそろくなにかの変身ヒロイン物のアニメの小道具か何かであろう

ピンクを基調に色どられた先端にハートの物体をくつつけたロッドを優雅にクルクルとまわし続けている。

そして再度そのUMA（謎だらけ未確認生命体）が「こつちに来なさいって言ってんだろ！このダボ！」

と語気を荒くして俺を罵って来る。俺はただ混乱の只中にいた。な

んでこんな自分よりも背の小さい少女に

ここまでののしられているのだらうと。しかしここまで罵られていい気分になるはずも無く

なんだかムカついたので中々言うことをきかない奴と見せかけつつも顔をそらしたまま聞き耳を立ててみる。

我ながら何をやってるんだかと思うが、頭の悪いなりに考えた今の俺の必死の抵抗だった。

そして、そんな俺にソイツは勝ち誇ったかのようにこう言いやがった。

「アンタ、今暇ならワタシを泊めなさい。これは命令よ。」と。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

何で？どうしてそうなる？なにがどうなったら、

見ず知らずの人間を泊めて差し上げると思っていなさるんだろうかこの黒タイツは。

とりあえず呆然としているわけにもいかない。コイツがなんだか知らんが、

俺の生活の平穏を脅かそうとしているのは確かだ。ここは速やかに迅速かつ的確に行動しなくては。

しかもなんでだか上から目線な物言いではないか。ここは一つ文句

も言ってやらないと気がすまん。

そう思い立ち、俺はけなしの勇気でもって相手に反旗を翻すが如く、

農民一揆を思わせるような剣幕でもって相手を睨み付けながら冷静と勤めつつも語気も荒く言い返した。

「いやなんなんだよお前、なんで人んち泊まろうとしてんだ。ついさっきここであつた見ず知らずの女を

自分の家に泊めさせる様な趣味は生憎持ち合わせていねえんだよ。わかつたらもう俺にかまうな！」

おおお、中々やるではないか俺。ナイス回答だ俺！心の中で立てた親指は雄雄しくそそり立ちつつ。

少女に背中を向けて歩き去つ・・・ていこうとしたそのとき。

「ふゝん、女の子が困ってるってのに、手の一つも貸さないんだあ・・・へえ・・・。」

と底意地悪く低い声が俺の背中に突き刺さる。しかし俺は微動だにしない。

なぜなら相手はUMA・・・じゃなくて変質者なのだ。背をむけたら後ろからザックリ！

みたいな展開が待ち受けていそうだが実際ヒカリ物をもっている痕跡どころか一回り小さいくらいの少女に

良い様にされるような程俺自身、やわではない。

そうして夕陽を正面に受けて背中影がいい感じに伸びて、まるでヒーロー物の名場面でもあるかのような状況でつと、冷やかな冷水が突如として俺を襲った。

「アンタんち……確か両親はすでに他界してるんだったわよねえ……」

そう言われて体が凍りつく。なんで部外者がそんなことまで知っている……？

俺は震える体を必死に抑えつつ上ずった声で懸命に叫んだ。

「な、なんなんだよお前……？ 気味悪いな……。ど、どこかで会ったりとかしたか？ それとも

俺の知らない親戚だか従姉妹だか隠し子かなんかか？！」

もう自分でもワケがわからないくらい大げさに取り乱してしまう。隠し子は流石に無いだろうと思うが。

「ワタシ、こうみえても怪盗なんだけどね。他人のお家様の事情にはよく耳が利くのよ。」

意味がわからん。なんだ？ 怪盗……？ 怪盗ってアレか？ キャツ○アイよろしく屋根から屋根へ飛び移ったり

レーザー探知機がどうので数億する宝石を巡ってお偉いさんが、なアレのことだろうか？

「信じない？まあ信じらんないだろうねえ。いきなり怪盗ですって自己紹介もまず無いだろうし。まっ、信じる信じないはアンタの自由よ。ワタシはそれでも自分を変えないから。で、泊めてさしあげたいの？泊まっていたきたいの？どっち？」

っていやちよつとまで選択肢に拒否権はないんかい、とついぞ関西人ばりのツツコミを入れてしまいそうになり

慌てて自分を制す。落ち着け・・・落ち着け・・・相手は子供だ・・・何をそんなに慌てている・・・

そうだ冷静になるんだ浜井 田路・・・冷静に善処して今の最善の策を練るんだ・・・。

そして俺が心頭滅却火もまた涼しくしてるところに追い討ちをかける変態チビ少女。

「大丈夫アンタんちの鍵ならキーピック使えばいつでも出入り出来るし。窓からの侵にゅ・・・あ違ったわ、御宅訪問もお手の物よ。」

と軽くウインク・・・したように見えた。

んな突撃！お宅の晩御飯みたいな家庭内突入的ノリで言われてもこっちは全くもって冗談じゃないのである。

サラッと怖いこと言いやがるなこの女・・・。と思いつつ浜井 田路は途方にくれた。

それと同時に思ってしまった。「この女からはどうやっても逃げられ無いんじゃないだろうか?」と。

そう、今思えばこの日が俺にとって人生最悪とも言つ程の起点であつたに違いない。

そしてこの謎だらけ変態少女との。この世で、もっとも最悪な共同生活を送る羽目に相成つた

この俺「浜井 田路」(はまいとうじ)がお送りする、

未確認生命体みてえな少女との稀有な日々の始まりはこうして幕を開けるのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2301f/>

怪盗すていーるはーと！

2011年1月6日02時28分発行